

〈体育〉

学び合う力を育てる体育授業の工夫

—— 運動のおもしろさを活かした言語活動、グループ活動の充実を通して（第4学年） ——

糸満市立真壁小学校教諭 石 原 美希子

I テーマ設定の理由

これからの知識基盤社会や、グローバル化が進む世の中を子ども達が生き抜くためには、確かな学力、豊かな心、健やかな体を総合的に併せ持つ「生きる力」を身に付けていくことが必要である。「小学校学習指導要領解説体育編」では、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」や、「児童の能力・適正・興味・関心等に応じて、運動の楽しさや喜びを味わい、自ら考えたり工夫したりしながら運動の課題を解決する学習」をすることが求められている。すなわち、知・徳・体の調和のとれた、たくましく生きる子ども達の育成が必要であり、それらの子ども達の育成に体育の果たす役割は大きいと考える。

近年の児童生徒は、中央教育審議会答申「子どもの体力向上のための総合的な方策について」でも指摘されている通り、体力の低下や、運動する子どもとそうでない子どもの二極化傾向が見られる。また、核家族化やコンピュータ社会の浸透により、人と直接関わる場面が減ってきている。そうした状況を踏まえ、体育の授業で、運動の楽しさや喜びを伝え、運動する習慣を身に付けさせることや、学び合い、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を身に付けさせる必要がある。

本校は、1学年1クラスということもあり、異学年間の交流がさかんで、温かな雰囲気である。その本校の課題として挙げられるのは、仲間に自分の考えを伝え、学び合うという部分である。日々の体育の授業では、発問作りに力を入れ、技能のポイント、仲間の姿のよさを発表する場を設定し、これらを積み重ねることで、発表し、伝えることに対しては、一定の成果が得られた。しかし、運動技能を体得し、技のポイントを発表しても、感想を伝え合う段階にとどまり、同じ課題を共有し、仲間と課題解決のために試行錯誤しながら解決に向かっていくような、学び合う姿を引き出すことができなかった。これまでの指導を振り返ると、技術の上達や獲得のために場の工夫はするものの、子ども達が運動のおもしろさに夢中になり、試行錯誤し、教え合っていくような活動を十分に設定することができなかった。そのことを踏まえ、本研究では、本校の子ども達に体育の授業を通して、学び合う力を育成したい。それが、他教科にもプラスの働きとなり、生きる力の醸成にもつながっていくのだと考える。

そこで本研究では、取り組む運動のおもしろさを活かした言語活動、グループ活動の充実に取り組んでいく。成家篤史（2012）は、「教師は子どもの身になり、その運動ならではの動きの『感じ』のおもしろさや心地よさを導き出し、それにふれられるように授業に仕掛けを施していきます。」と述べている。運動のおもしろさについて考え、それらを基に単元の内容を構成し、おもしろいと感じる運動を通して、仲間と動きを見合い、アドバイスをし合う中で、言語活動やグループ活動の充実を図り、仲間と学び合う力を育成したい。

これらをふまえ、本研究で扱う単元はマット運動とする。マット運動のおもしろさを追究していくことで、その子なりの「できる」を増やし、集団で動きを合わせることで、同じ課題を共有し、学び合う力を育てていきたい。運動のおもしろさを生かした言語活動、グループ活動の充実を図ることで、学び合う力を育てられるのではないかと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

マット運動の学習において、運動のおもしろさを活かした言語活動、グループ活動の充実によって、学び合う力を育てることができるであろう。

II 研究内容

1 体育学習における学び合う力について

(1) 体育学習における学び合いとは

佐藤学（2000）は、『学び』とは、モノ（対象世界）との出会いと対話による〈世界づくり〉と、他者との出会いによる〈仲間づくり〉と、自分自身との出会いと対話による〈自分づくり〉とが三位一体となって遂行される『意味と関係の編み直し』の永続的な過程」と述べている。体育学習における学びとは、学習者を中心に、対象、他者、自己が、「できる、できない」「分かる、分から

ない」を繰り返し進歩していくことだと考える。そして、体育学習における学び合いとは、仲間との違いから解決方法を探究したり、課題に対して具体的に共有する視点を持ち、ともに探究したりしていくことを通して、仲間と高まり合っていくことだと考える。

そこで、本研究で考える学び合う力とは、マット運動のおもしろさを活かす中で、子ども達がアドバイスや試行錯誤をしたり、グループの動きを創ったり合わせたりする方法を相談していく過程にある高まり合いと捉える(図1)。

(2) 学び合いを成立させる要件

鈴木直樹(2012)は、伝統的な学習モデルと新しい学習モデルの比較を示し、教師から子どもへの一方通行ではなく、子ども達同士が、多様な関わりができるような場を設定し、受動的に学ぶ場面より、能動的に学ぶ場を増やしていくことの必要性を示している。それらを踏まえ、今後の体育学習では、運動のおもしろさを活かした動きや課題を仲間と共有し、技能の向上を目指し、互いに探究していくような学びが求められていくと考える。そのために教師は、その教材のおもしろさを活かし、関わり合って学ぶことができるように、教材を知り、授業を仕組んでいく必要がある。

そこで、本研究では学び合いを成立させるため鈴木直樹の新しい学習モデルを意識した図2を参考に、教材のおもしろさを活かし、子ども達が多様な関わりを通して能動的に学ぶ姿勢を育てられるよう計画的に授業づくりに取り組んでいく。

2 学び合う力を育てるための手立て

(1) 運動のおもしろさについて

運動には様々なおもしろさがあるが、本研究では運動のおもしろさを、以下の3点に絞り、追究していく。1点目は、器械運動に類似した動きにゲーム的な要素を取り入れた運動に取り組むこと、2点目は夢中になれる運動に取り組むこと、3点目はグループごとに動きを合わせたり創り上げたりすることである。子ども達は運動技能を獲得したときに大変晴れやかな表情を見せる。そのため、器械運動に類似した動きにゲーム的な要素を取り入れた運動、夢中になれる運動に取り組む、学び合い、技能を獲得することは体育学習のおもしろさの重要な部分だと考える。また、動きを創ったり合わせたりする中で子ども達同士が試行錯誤し、相談し、高まり合うことができたとき、達成感と共におもしろさが生まれると考える。そこで、本研究ではおもしろさを以上の3点に絞り、追究していく。

(2) 運動のおもしろさを授業づくりに活かす方策

岡野昇(2015)は、『『運動の中心のおもしろさ』を明確にするということは、単元としての『まとまり』のあり方や本質をどうとらえるかという『内容構成』の視点の明確化であり、学習指導案に掲げる1番目の単元目標を明確に設定する視点でもある。』としている。そこでまずは、教師自身がその運動のおもしろさを考え、おもしろさから身に付けさせたい力をはっきりさせておくようにする。また、子ども達がどのような姿で学んでいくとよいのかという見通しを持っておく。本研究では、学び合う力を育てるために、器械運動に類似した動きにゲーム的な要素を取り入れた運動や、夢中になれる運動をすること、グループの動きを創ったり合わせたりすることをおもしろさと捉え、これらの中で言語活動やグループ活動の充実を図り、研究を進めていく。そのため、単元を通して器械運動の技に類似した動きにゲーム的な要素を取り入れた運動に取り組む、単元の前半では、夢中になれる運動、後半ではグループで動きを創ったり合わせたりすることに取り組んでいく。

① 器械運動の技に類似した動きにゲーム的な要素を取り入れた運動について

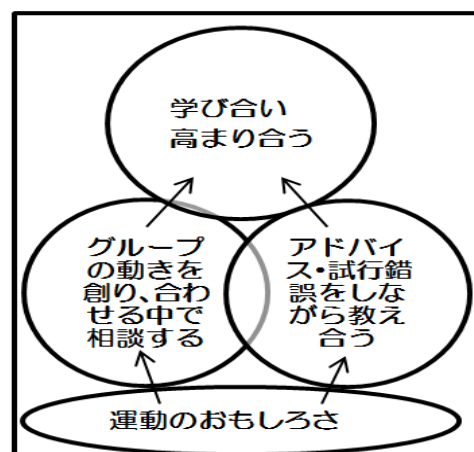


図1 本研究における学び合い

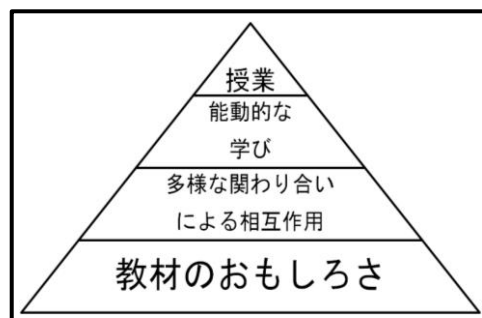


図2 新しい学習モデルによる授業づくり

解説体育編によると、「指導に際しては、すべての児童が運動の楽しさや喜びに触れることができるよう、技に関連した易しい運動遊びを取り入れたり、易しい場や条件のもとで段階的に取り組めるようにしたりする。」とある。まずは表1の「器械運動の技に類似した動き」にゲーム的要素を取り入れ、授業の前半で毎時間行い、関わり合う中で、学び合っていく。これらの動きは、器械運動の技そのものと比較すると難易度が低く、取り組みやすい上、楽しみながら活動することができる。本研究では、これらを運動のおもしろさと捉え、授業の前半に取り入れ、十分に体を動かしていく。その後、発展技や組み合わせ技に挑戦していく。

表1 器械運動の技に類似した動きとつながり

器械運動の技に類似した動き	つながる器械運動の技
ゆりかごから起き上がりジャンプ	様々な前転・開脚前転・台上前転等
背支持倒立からの起き上がり	
ボールキャッチ前転	
足で玉入れ・ゆりかご	後転・開脚後転等
かえる足打ち	倒立・三点倒立・側方倒立回転・開脚跳び・台上前転・首はね跳び・頭はね跳び等
かえるバランス	

② 夢中になれる運動について

子ども達が夢中になれる運動とは、時間を忘れるほど熱中し、技能を身に付けるまで繰り返し取り組みたくなるような運動のことだと考える。個人差はあるが、誰しも遊びを通して、夢中になり時間を忘れてしまうまで体を動かしたことがあるのではないかと考える。そのような運動を単元の中に取り入れ、学び合う力を育てていきたい。そこで本研究では、ボールキャッチ前転を夢中になれる運動として取り入れる。この技は、ボールを投げて前転を行い、前転が終わるところでボールをキャッチする技である。ボールキャッチ前転は、前転という比較的挑戦しやすい技にボール投げとキャッチが加わることで難易度が上がり、夢中になり、挑戦する意欲を持つことができる考える。

(3) 言語活動の充実について

解説体育編によると、「体を動かすことが、身体能力を身に付けるとともに、情緒面や知的な発達を促し、集团的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成することや、筋道立てて練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合う活動などを通じて論理的思考力をはぐくむことに資することを踏まえ」とある。これらが示すように、体育においても、言語活動の充実を図り、学び合っていくことが求められている。そして、体育における言語活動は、「体を動かすこと」という言葉が示すように、体を動かす過程の中で生まれ、活動をしながら深まるものだ捉える。森勇示(2014)は、「体育活動を充実させることで、言語が必然的に生じ機能するような授業になる」としている。体育における言語活動とは、書いたり、話し合ったり、伝え合ったりすることだけを目的とするのではなく、体を動かす中で発生し、その後の動きに活かされ、また体を動かす中で発生することを繰り返していく、すなわち、体を動かすことと一体となり、深まっていくものだと考える。

① アドバイスメモの活用

学び合いを発生させるために、「仲間の動きを見て、アドバイスを伝えること」「仲間のアドバイスを聞いて自分の動きに活かすこと」に取り組んでいく。そこで、単元の前半では、見ている側はアドバイスをしっかり伝え、取り組む側はアドバイスをしっかり聴き取り、アドバイスメモにアドバイスの内容をメモして、自分の動きに活かせるものを次の自分の順番が来たときに取り入れるようにする(図3)。アドバイスメモは、活動の妨げにならないよう、簡単にメモを取るという意識で活用する。

② 視点の明確化

単元の中盤では自分が取り組む技の「これができたらok」という技の視点をカードに記入する(図4)。そして

1. 練習する(した)技に○をつけたり記入したりしよう。

技:前転 かいぎやく前転 後転 かいぎやく後転 そく方とう立回転
めあて:
どんどんめあて:
メモ:教えてもらったこと、気づいたこと、おもしろさ、友達の様子を見て、取り組み回数など自由にメモしよう!

図3 アドバイスメモ

誰が交代する。☆仲間も自分もできるようになるよう教え合いましょう!			
技	これができたら OK	点数	合格印
前転	・		
ボールキャッチ前転	・		
前転ジャンプ前転	・		
かいぎやく前転	・		
後転	・		
かいぎやく後転	・		
そく方とう立回転	・		

図4 視点の明確化

その視点を仲間に伝えて技に取り組む。仲間はそれらの視点に従って技を見てアドバイスを。技をした後はもらったアドバイスをアドバイスメモに書き込む。教師は、子ども達が視点を見つめるために、教え合うことや技の完成写真からヒントを得ること等を働きかけていく。これらを通して学び合い、技能を獲得し、動きを高めていく。

(4) グループ活動の充実

単元を通して集団の側面を高めたり、学び合ったりしながらグループ活動の充実を図る。特に単元の後半ではグループごとに動きを創ったり合わせたりする活動を行う。

まずは、単元を通して器械運動の技に類似した動きにゲーム的要素を取り入れた運動を行いながらグループ活動の充実を図る。その際、認め合う雰囲気を大切に、素早く行動するなど集団の側面を高め、意識させていくためにそれらに対する自己評価チェックを行い、全体交流や体育通信で仲間のがんばりを共有していく。

単元の後半では、2つのグループを組み合わせ、互いのグループの動きを見合ったり、教え合ったりして学び合い、動きを高めていく。グループごとにマットの配置や動き、動きの組み合わせ、グループの動きの視点であるアピールポイントを考え、その後2つのグループごとに、互いのグループの動きを見合い、アドバイスし合う。また、最終発表会を2回行い、1回目の発表の後にアドバイスをし合い、それらをもとに練習して、2回目の最終発表に臨むこととする。これらに取り組むときに、栗原昭徳（2012）の「発表の仕方」を参考に作成した表2の事柄を、単元の後半と最終日の発表会で実践していく。2つのグループによる活動、全体発表会での教え合いやそれをもとにした練習を通して学び合い、動きを高めていく。

表2 単元後半の活動の流れ

2つのグループによる活動の流れ	
①	一方のグループは自分達の動きの中で、見てほしい視点（アピールポイント）をもう一方のグループの仲間に伝えて動きを見せる。
②	もう一方のグループは、伝えられた視点を中心に動いているグループの動きを見る。
③	動きを発表したグループに対し何がどのようによかったか、どこをどのようにしたらよくなるかを伝える。
④	動く方と見る方を交代し、①～③を繰り返す。
⑤	次に動きを見せるときは、先ほどのアドバイスを活かして臨む。

全体発表会の流れ	
①	グループごとに順番にアピールポイントを伝えて動きを発表する。（1回目の発表会）
②	各グループの発表が終わったときにその都度、アドバイスタイムを設定し、教え合う。
③	練習タイム（仲間のアドバイスを参考に動きを高める。）
④	グループごとに順番にアピールポイントを伝えて動きを発表する。（2回目の発表会）
⑤	全体でのふり取り

Ⅲ 指導の実際

1 単元名 「器械運動」 マット運動

2 単元目標

- (1) マット運動の楽しさや喜びに触れることができるよう、進んで取り組み、きまりを守り仲良く運動をしたり、場や器械・器具の安全に気を付けたりしようとする。（関・意・態）
- (2) 自己の能力に適した課題を持ち、技ができるようになるための活動を工夫できるようにする。（思考・判断）
- (3) マット運動の基本的な技を身に付けることができる。（技能）

3 単元の評価規準

運動への関心・意欲・態度	運動についての思考・判断	運動の技能
① 技ができる楽しさや喜びに触れることができるようにマット運動に進んで取り組みようとしている。	① 基本的な技の動き方や技のポイントを知るとともに、自分の力に合った課題を選んだり考えたりしている。	① マット運動では、自分の力に合った基本的な回転技ができる。
② 器械・器具の使い方や運動の行い方、きまりを守り、友達と励まし合って運動をしようとしている。	② 基本的な技の練習方法を知るとともに、自分の力に合った練習方法や練習の場を選んでいる。	② 仲間と動きを合わせて運動することができる。
③ 友達と協力して、器械・器具の準備や片付けをしようとしている。	③ 仲間と動きを選び、適切に組み合わせるなど動きを創り上げるために考えている。	
④ 運動する場や器械・器具の使い方などの安全を確かめようとしている。		

4 指導計画

時	学習のねらいと学習活動	○指導上の留意点 ☆運動のおもしろさを活かした言語活動、グループ活動に関わる留意点や手立て	評価 【方法】
1	【オリエンテーション】 ・学習の流れと約束の確認。 ・単元を通した見通しを持つ。 ・器械運動の技に類似した動きにゲーム的要素を取り入れた運動に取り組む。 ・仲間との関わり方や自分の意見の伝え方を学ぶ。 学習のルールや運動の仕方、仲間との関わり方を学ぶことができる。	○整列や集合の約束をゲーム形式で練習し、習慣となるよう意識付けさせる。 ○考えを仲間に伝えたり聴いたりして学び合いながら、学級や個人の力を向上させていくことを共通理解する。そのために具体的な取り組みを考えたり示したりし、できていることから褒める。 ○単元の見通しを持たせ、意欲が高められるようにする。 ○単元を通して安全に運動することの大切さを伝える。 ☆ボールや玉入れの玉などを用い、器械運動の技に類似した動きにゲーム的な要素を取り入れた運動や夢中になれる運動の取り組み方を紹介し、仲間との関わり方や自分の意見の伝え方を定着させることができるよう、練習させ、見届ける。	関・意・態 ① ② 【行動観察・発言・学習カード】
2 3 4	【アドバイスメモの導入と活用】 ・器械運動の技に類似した動きにゲーム的な要素を取り入れた運動、夢中になれる運動等様々な技に挑戦する。 ・仲間と動きを見合い、アドバイスメモを活用し、学び合う。 言語活動の充実を通し、学び合いながら技能を高める。	☆多くの運動量を確保し、楽しみながら運動するために器械運動の技に類似した動きを行い、繰り返し運動させるようにする。 ○場の安全やきまりを守る意識を持たせ、習慣づけるためにそれらを意識し、実践している姿を全体に紹介する。 ☆学び合うために言語活動の充実を図る手立てとしてアドバイスメモを活用させる。 ☆仲間との関わり方や学び方を紹介したり、考えさせたりする。 ○個に応じた声かけや支援方法を考慮する。	思・判①② 技① 【行動観察・アドバイスメモ・学習カード】
5 6	【視点の明確化】 ・技の「これができたら ok」という視点を考える。 ・技をするときに視点を伝え、お互いに動きを見合い、検定を行う。 言語活動の充実を通し、学び合いながら技能を高める。	☆自分自身の挑戦したい技に挑戦させる。 ☆視点を伝えてから技を行い、視点をもとに動きを見てアドバイスをしたり、よかったところを伝えたりする活動を見届け、学び合わせる。 ○視点をしっかり伝えて技を行っているかを確認する。 ○視点を見つけることに戸惑っている子どもには写真などを示し、取り組もうとしている技にとって大切な動きを見つけさせたり一緒に考えたりする。	思・判①② 【行動観察・アドバイスメモ・学習カード】
7 8	【グループ活動の充実】 ・マット配置・動き・動きの視点を決める。 ・2つのグループでアドバイスをし合い、練習を繰り返す。 グループ活動の充実を通し、学び合いながら技能を高める。	○子ども達の考えやアイディアを生かすことができるように認めたり、励ましたりする。 ○グループの特徴に合わせて関わり方を考慮する。 ○安全に運動することを徹底させる。 ☆2つのグループで、互いのグループの動きを見て学び合い、動きを高めさせるようにする。	思・判③ 技② 【行動観察・学習カード】
9 10	【発表会とふり振り返り】 ・1回目の発表～アドバイスタイム ・練習タイム～2回目の発表 学び合いながら技能を高めてきた成果を発表する。	☆1回目の発表を行った後にアドバイスタイムを設定し、その後練習を行い、最終発表を行う。 ☆グループの発表に対して、どの子も1回はどこかでアドバイスをすることをルールとする。 ○単元を通してがんばってきたことや、学び合っていた姿などを価値付け、今後の体育学習や学校生活への意欲を高めさせる。	思・判③ 技② 【発表の参観・発言・学習カード】

5 本時の指導（7時間目/10時間）

(1) ねらい

- ・互いのグループの動きを見合い、教え合うなどして学び合い、動きを高めることができる。

・仲間と協力しながらルールを守って運動することができる。

	○運動の側面・●集団の側面における児童の動き	学習活動	教師の指導と評価（○運動の側面・●集団の側面・☆運動のおもしろさを活かした言語活動、グループ活動に関わって・★評価）
準備運動計画	○それぞれの動きを丁寧に繰り返し行い、体を温め、動きに慣れる。 ●場の設定を協力しながら行う。 ●号令に応えながら準備運動を行う。 ●グループで順番や運動の仕方を守りながら素早く活動する。	【場の設定と準備運動～あいさつ】 ・ランニング3周目に犬歩き、うさぎ走りを行い、体操、挨拶を行う。 【器械運動の技に類似した動きにゲーム的要素を取り入れた運動】 ・グループごとにゆりかごから起き上がりジャンプ・足で玉入れ・かえる足打ち・背支持倒立・かえるバランス・前転・後転等を行う。	●素早く行動したり号令にしっかり応えたりしている姿を価値付ける。 ☆器械運動の技に類似した動きでは、グループごとに関わり合い、学び合うことが習慣付いているかを見届けながら、動きの補助を行う。
展開	めあて：おたがいのグループの動きを見合い、教え合い、動きをよくしていこう。 ●マットの配置や動きを相談したり確認したりする。 ○自分たちの決めた動きを合わせながら繰り返し運動する。 ●仲間のグループの動きを見て、視点に沿ってアドバイスをする。 ○●仲間のグループからアドバイスされたことを自分たちのグループの動きに取り入れる。 ●マット使用の交代や配置変えを速やかに行う。 	【全体計画会】 ・本時の授業の流れや取り組み方を知り、めあてや約束を確認する。 【グループ計画会】 ・グループでマットの配置や動きを確認する。  【2つのグループによる練習】 ・グループごとにマットを共有する仲間になり、お互いのグループの動きを見合い、学び合いながらグループの動きを高める。 ・練習を行うグループは何に気を付けていて、何をもらえるのかという視点（アピールポイント）をってもらうグループに伝える。 ・見ているグループは、視点（アピールポイント）に沿ってアドバイスをする。 ・動き終わったグループは、アドバイスをメモに書き、それらを基に自分たちの動きを更に高めるようにする。 ・それぞれの動きを見て、アドバイスし合うことを繰り返し、なるべく多くの練習量を確保する。	○●☆練習量を増やし、グループ活動の充実を図るために、時間を有効に使ったり、仲間のグループの動きをしっかりと見てアドバイスをしたりしているグループを認め、全体に広める。 ☆自分たちのグループの動きの視点や仲間のグループへのアドバイスをしっかりと伝えて活動しているかを見届ける。 ☆動きに習熟してきたグループには、発展的な動きができるように、そのグループ自身や見ているグループに働きかけたり、ヒントを与えたりする。 ★仲間と動きを選び、適切に組み合わせるなど動きを創り上げるために考えている。【思・判③】 ★仲間と動きを合わせて運動することができる。【技②】
反省	○●グループの動きの状態や成果、課題をふり返る。 ○●仲間のグループと学び合い、技能が向上したことやその理由をふり返る。 ●協力したこと、ルールを守ることなど集団の側面をふり返る。	【グループ反省会～ふり返りと全体反省会】 ・グループの動きの成果や課題、自分自身の成果や課題、仲間と学び合ったことなどをワークシートに記入し、ふり返る。 ・ふり返ったことを全体で発表し、共有する。 ・次時への見通しを持つ。	○●2つのグループによる練習で学び合い、上達が見られた姿を価値付け、広める。 

6 仮説の検証

研究仮説に基づき、マット運動の学習において、マット運動のおもしろさを活かした言語活動、グループ活動の充実を通して、学び合う力を育てることができたかを、検証授業における学習カード、アドバイスメモ、子ども達による自己評価、行動観察、発言記録、画像から分析、考察を行う。

(1) 言語活動の充実

① 夢中になれる運動を通したアドバイスメモの活用

第1時よりボールキャッチ前転を行い、第2時よりアドバイスメモを取り入れた。4年生の子ども達は、前転に対しては全員が抵抗なく取り組むことができる。そのため、前転にボール投げとボールキャッチが加わることで難易度が少し上がり、夢中になって取り組む中で、どのようにしたらできるようになるのかを学び合わせていきたいと考えた。また、夢中になる中で前転を習熟させ、前転するスピードを自分でコントロールさせたり、繰り返し取り組ん

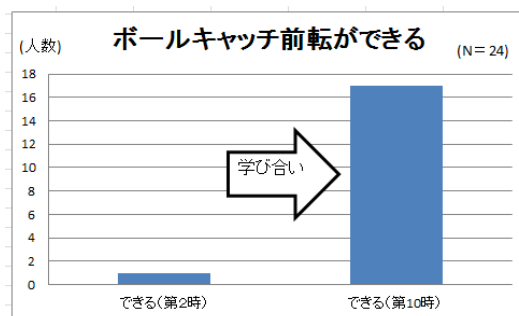


図5 上達したボールキャッチ前転

だりすることで開脚前転や台上前転などの他の技につなげさせたりすることもねらいとしていた。そこでボールキャッチ前転を行いながらアドバイスメモを用い、技を行った後にアドバイスを伝え、アドバイスをメモし、動きに活かしていった。アドバイスメモがあることで、「見てください。」「アドバイスをちょうだい。」という言葉が各グループから聞かれるようになった。その結果、第3時から、めあて設定のときに、子ども達の口から「教え合おう」という仲間との学び合いを意識した言葉が出てくるようになり、子ども達が能動的にめあてを設定することができるようになった。

ボールキャッチ前転に最初に取り組んだ時は、24人中 23人はできなかった。しかし、第10時には、24人中 17人がボールキャッチ前転をすることができるようになっていた(図5)。ボールキャッチ前転はポイントとなる動きが分かりやすく、ボールがどこに投げられ、キャッチに間に合うように前転ができたか、そしてボールがキャッチできたかが一目で分かる。その結果、表3のようなアドバイスの言葉が生まれ、アドバイスメモを用いた学び合いが生まれ、ボールキャッチ前転ができるようになっていった。また、しゃがんだ状態でボールキャッチができた子どもに発展的な課題を考えさせたことで、立ってボールをキャッチすることや開脚前転、側方倒立回転の後にボールキャッチをするなどの発展技に挑む子どもが現れた。

夢中になれる運動にアドバイスメモ取り入れることは、相手の動きから学び、課題に対して教え合い、上達するなどの学び合いを発生させるために有効であった。

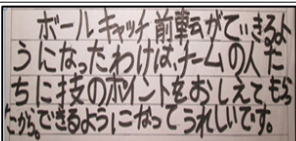
② 視点の明確化

第5時から、自分が取り組む技の「これができるたらok」という視点を考え、明確にして、それらを仲間に伝えてから技を行い、技ができているか判定したり教え合ったりする活動を行った。これらの活動を通してお互いの動きを見合うという習慣が定着し、ボールキャッチ前転、開脚前転、後転、開脚後転、様々な組み合わせ技や発展技に対し、アドバイスをし合い、学び合い、技能を高める姿が見られた。

③ 言語活動の充実による子ども達の変容

図6は授業の終わりに毎時間行ってきた自己評価「学び合い」の◎評価の割合をグラフ化したものである。授業の中で仲間と動きを見合ったり、教え合ったりしたことにおける高まり合いやグループ活動における教え合いや練習を通じた動きの高まり合いを学び合いと位置づけ、◎は非常に高まった、○は高まった、△はあまり高まらなかった、という基準で自己評価をしてきた。アドバイ

表3 学び合ったアドバイスやふり返り

ボールキャッチ前転のアドバイスの言葉	
・もうちょっと高くボールを投げる。 ・右斜め前に投げる。 ・ボールをまっすぐ前に投げる。 ・キャッチの構えをする。手を広げる。 ・ボールを見る。 ・まっすぐ高くボールを投げて、起き上がる時にボールを取る。 ・ボールを強く投げない。ちょっと弱く投げる。 ・ボールを見失わない。ボールが行く所を予想する。 ・ボールを投げた後、ボーッとしない。 ・リラックスして投げる。 ・速く前転する。 ・足を曲げて前転する。 ・後頭部をつける。 ・前転したらすぐ立つ。次は立ってキャッチする。	
ボールをキャッチしている様子やふり返り	
	

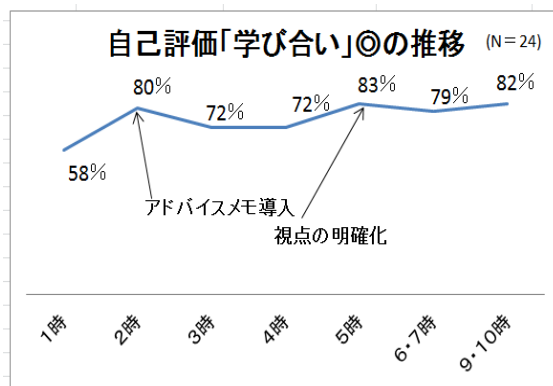


図6 自己評価の「学び合い」◎の推移

表4 ふり返りの記述内容の変化

時・人数	学び合いをもとにした記述	人数	合計	感想のみの記述	人数	合計
1時 24人 アドバイスメモ導入前	☆アドバイスをもらったことを活かし、次こうしてがんばる。	1	5人	おもしろかったこと	5	19人
	●仲間の○○なよさを自分に活かす	4		仲間のよいところ	3	
				むずかしかったこと	1	
				次できるようにする	7	
				できてよかった	3	
2時 21人 アドバイスメモを導入	アドバイスをもらったことでよかった・こうするといふと分かった	6	19人	けがを早く治して参加したい	1	2人
	●仲間の○○なよさを自分に活かす	5		準備が早くできた	1	
	☆アドバイスをもらったことを活かし、次こうしてがんばる。	6				
	仲間に教えることができた	1				
	仲間の○○がうまくいかない。どうしたらいいのか	1				

スメモ導入前の第1時は「学び合い」を◎にした割合が24人中14人の58%であった。アドバイスメモを導入した第2時に◎の割合は21人中17人の80%に上昇し、その後は70%を下回ることなく推移し、視点の明確化を行った第5時は◎の割合が24人中20人の83%に上昇している。

更に、アドバイスメモを導入した第2時と導入前の第1時のふり返りを比較してみるとアドバイスメモを導入したことで、ふり返りの記述が、仲間から学ぶことを意識した内容に変化したことが分かる(表4)。第1時は学び合いをもとにしたふり返りを記述している子どもは24人中5人で、感想のみの記述が19人であった。しかし、第2時は学び合いをもとにしたふり返りを記入している子どもが21人中19人で感想のみの記述が2人となった。これらのことから、仲間と学び合うという意識を子ども達に持たせ、学び合いを発生させることに、アドバイスメモの活用や視点の明確化を用いた言語活動の充実は有効に働いたと考える。

(2) グループ活動の充実

単元全体を通して器械運動の技に類似した動きにゲーム的要素を取り入れる運動を通して、また単元の後半ではグループごとに動きを創作し、合わせ、発表する活動を通して、それらをマット運動のおもしろさと捉え、グループ活動の充実を図り、学び合う力の育成を図った。グループ形態は4人ずつのグループが6つあり、単元の後半にはそれぞれ、1・2グループ、3・4グループ、5・6グループが互いにグループとなり活動した。

① 器械運動の技に類似した動きを通したグループ活動の充実

単元全体を通して授業の前半で、器械運動の技に類似した動きにゲーム的要素を取り入れた、ゆりかごからの起き上がりジャンプ、足で玉入れ、かえる足打ち、かえるバランス、背支持倒立をグループ活動の充実を図りながら行った。

まず、足で玉入れは後転の類似運動として行った。グループで二人ずつペアとなり、一人がかごを持ち、そのかごにもう一人が足で玉を入れ、互いに数を数えながら行った(写真1)。かえるバランスや背支持倒立は、グループ全員で数を数えながら取り組んだ。また、ゆりかごからの起き上がりジャンプは、グループで動きを合わせることに取り組んだ。すると、「ワン、ツー、スリー、フォー」や「いっせーの一で」などのかけ声が自然と起こり、かけ声のよさを仲間から学んだ様子が見られた(図7)。また、ゆりかごや前転のスムーズな起き上がり方をグループごとに考えさせた所、手をつかずに起き上がった方がいいということに気付き、それらを教え合うグループが現れた(図7)。その後、グループごとに動きを自由に追加させる場を設定したことで、ジャンプした後に手拍子を入れるなど、グループでの学び合いを活かし、動きを付け足すグループが現れた(写真2)。

器械運動の技に類似した動きを通してグループ活動の充実を図ることは、技そのものに取り組むより難易度が低く、どの子も楽しむことができた。また、仲間と関わり合う楽しさを味わうことができ、仲間の動きから学び合う姿勢が育った。これらの動きは、技能の基礎作りと共に、学び合うための基本的な姿勢を育てることができる。

② 集団の側面を意識したグループ活動の充実

単元を通して集団の側面を意識したグループ活動を続けた。グループの仲間をしっかりと聴くことをクラス全体で確認し、素早い行動を取ることを協力することやがんばりの自己評価を継続し、全体交流で分かち合い、体育通



写真1 足で玉入れ

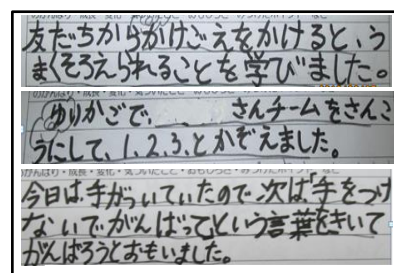


図7 学び合いの記述



写真2 動きを付け足す様子

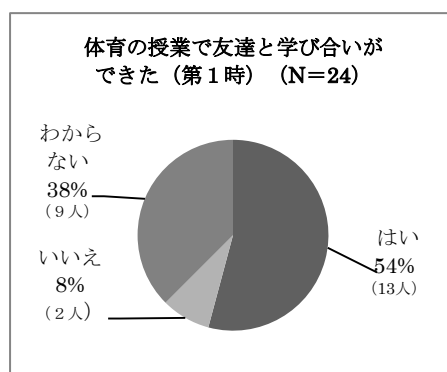


図8 学び合いに対する意識
(検証授業第1時)

信で広めてきた。これらを通して、単元後半のグループ活動がスムーズに運んでいった。また、自分たちの取り組みたい動きに伸び伸びと挑戦する様子が見られ、仲間と共に成長していこうという意識が育った。以下に授業第1時と授業後のアンケートの結果によるそれらの変容を示す。

学び合いについては、仲間と動きを見合い、教え合ったことにおける高まり合いやグループ活動における教え合いや練習などを通した動きの高まり合いを学び合いと位置づけ、アンケートを行った。

検証授業第1時のアンケートでは、「体育の授業で友達と学び合いができましたか。」の問いには、「はい」と答えた子ども達は13人で、「いいえ」は2人、「わからない」は9人であった(図8)。検証授業後の「体育の授業で友達と学び合いができましたか」の問いには、「はい」と答えた子ども達が20人「いいえ」が2人、「わからない」が2人となり、第1時「わからない」を選択した子ども達の9人中8人は、授業後は「学び合いができた」を選択し、「はい」に移行した(図9)。更に、検証授業後に「これからも体育の勉強で、友達と学び合いをしてみたいと思いますか」の問いには、「はい」と答えた子どもが23人で「いいえ」が1人であった(図10)。その理由を分析すると、「仲間と学び合うと技のポイントに気付き、お互いに成長し、上手にできるようになるから」というお互いの成長に喜びを感じているものが14人、「仲間と学び合うと楽しいし、仲良くなれるから」というおもしろさや仲良くなることに喜びを感じているものが5人というように、学び合いに対する価値をそれぞれ感じ取っている様子が見られた(表5)。検証授業後に学び合いに対して、「いいえ」や「わからない」を選択している子ども達の理由を分析してみると、更に一歩踏み込んだ個への対応や、グループ活動に対し、それぞれに適した教師の関わり方が必要だということが分かった。しかし、これらを選択している子ども達は、一生懸命であるがゆえに、高い理想を持って、自分やグループの動きを追究しているということも分かった。これらの結果から、グループ活動を、集団の側面を意識しながら継続することは、仲間と学び合う意識を持たせ、学び合う力やそれらを喜びとして感じる子ども達を育成することに有効であることが分かった。

③ 2つのグループによるグループ活動の充実

単元の後半では、グループの自主的な活動を重視し、グループごとにマット配置を考え、動きを創作し、アピールポイントを仲間のグループに伝えて2つのグループごとに学び合う活動を行った。各グループでマット配置から動きまでを自由に考え、それぞれのグループが特色ある動きを創作し、自分達の動きを追究していった。

これらの活動を通して各グループで、「見ているからや

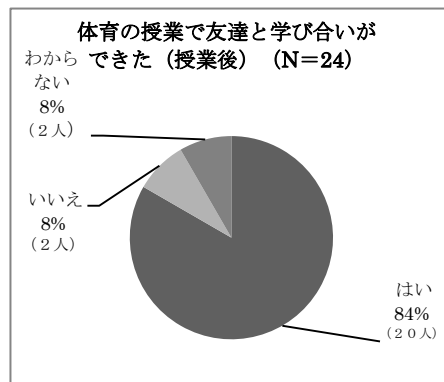


図9 学び合いに対する意識(検証授業後)

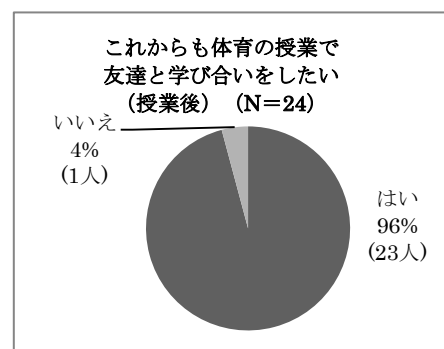


図10 学び合いに対する意欲(検証授業後)

表5 学び合いをすることに対するそれぞれの考え(検証授業後)

「これからも体育の勉強で学び合いをしたい」の問いで「はい」を選択した子ども達の理由(23人)		「いいえ」を選択した子どもの理由(1人)	
仲間と学び合うと技のポイントに気付き、互いに成長し、上手にできるようになるから	14人	学び合いをしたことがあるから	1人
仲間と学び合うと楽しいし、仲良くなれるから	5人		
仲間になんてなってもらいたいから	2人		
協力が大切だと学んだから	1人		
無記入	1人		

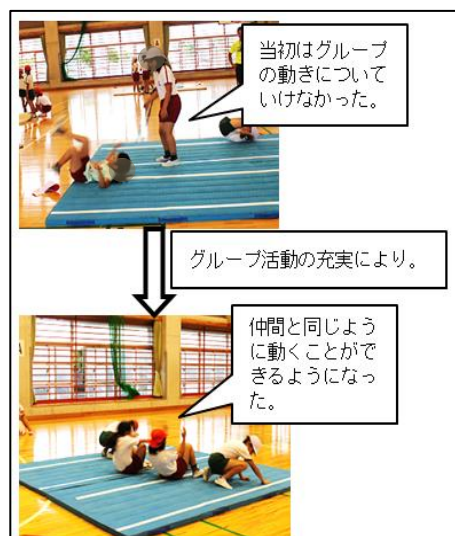


図11 動きの変容

ってみて。」と真剣に動きを見て、「最後のポーズの動きをもう一度グループで決めてしっかりやったほうがいいよ。」というような具体的なアドバイスを伝える姿が見られた。また「ここで手をタッチしよう。」というように動きのアイディアを伝え合い、練習を繰り返していった。

1・2グループには体育の勉強に苦手意識を持つA児がいた。A児は後転に苦手意識を持っていたが、1・2グループは、マット配置を早々に決め、練習とアドバイスを何度も繰り返したり、「前転ならできる。」と声をかけ、A児にできることから取り組むように働きかけたりしていた。この練習を通してA児は後転ができるようになった(図

11)。また、体育に対する意識も検証授業前は、「体育の勉強は好きですか」の問いに「どちらでもない」と答えていたものが、検証授業後は「好き」を選択し、マット運動の授業を肯定的に捉える記述を残すなど変容が見られた(図12)。

1・2グループはグループの自主性を発揮し、活発に関わり、学び合い、技能の向上が見られた。

5・6グループは、互いにタイミングの合わせ方や動きを増やすことをアドバイスし合っていた。6グループは、自分が自信を持ってできる技を一人一つ決め、技を始めるタイミングをそれぞれずらすという工夫を動きに取り入れていたが、一人一つしか技を行っていないので、5グループから「もっと技を増やした方がいいよ。」というアドバイスをもらっていた。そのアドバイスを取り入れようと、最終発表会に向けた練習で6グループは動きを増やす相談をしたが、口論となった。B児は、「僕たちみたいにボールキャッチ側転とかの技を増やすのはできてからの方がいいよ。できないと困るから、今日の発表には新しい技は入れない方がいいよ。」と、新しい技を増やすことに反対する意見を主張した。C児とD児は、「私達の班は、一人一つしか技をやってなくて、技を増やした方がいいと言われたし、もっと他の技も組み合わせたいし、入れてみたい。」と技を増やすことを主張した。その後、話し合いを経て、C児とD児がB児の意見を受け入れ、技は増やさず、班の動きの視点を、「個人の個性を活かす」にして最終発表までやり終えた。最終発表は、グループのねらい通り、一人一人の動きが今までで一番大きく伸びやかで、個性を活かした発表となった。見ていた仲間からも「1回目の発表よりよくなっていました。それぞれの技が大きくなっていましたからです。」という感想をもらうことができた。自分の考えをしっかりと持ち、それらを伝え合いながら試行錯誤し、折り合いを付けて発表する学び合いが見られた。

2つのグループによるグループ活動は、子ども達が活発に関わり、試行錯誤し、学び合うことができ、子ども同士による積極的な学び合いを発生させるために有効であった。

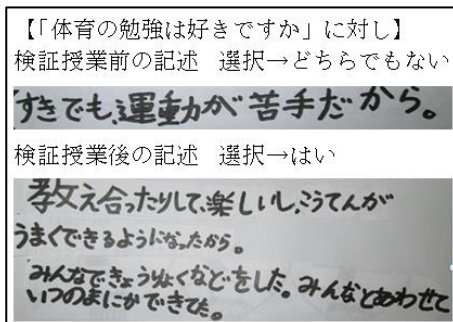


図12 体育に対するA児の意識の変化

IV 成果と課題

1 成果

- (1) 夢中になれる運動と共にアドバイスメモの活用や視点の明確化によって、言語活動を充実させたことで、仲間の動きを見てアドバイスをし合う姿が生まれ、学び合い、子ども達の技能を高めることができた。
- (2) 器械運動の技に類似した動きにゲーム的要素を取り入れる運動や、グループの動きを創作する中で集団の側面を意識してグループ活動を充実させたことにより、仲間と学ぶことに喜びを感じる姿勢や、仲間と学び合う力を育成することができた。
- (3) 言語活動を充実させたことで、発展的な動きや様々な技の組み合わせに挑戦する力を育てることができた。

2 課題

- (1) 個に応じた支援や各グループに対する必要な支援を今以上に適切に行うための、教師による更なる学びが必要である。
- (2) 技のポイントに対する気付きを更に深められるような実践研究が必要である。
- (3) 運動のおもしろさを追究することが技能の向上にどのように結びついていくのかを更に多くの運動で検証し、実践に活かしていく必要がある。

〈参考文献〉

- 岡野昇・佐藤学 2015 『体育における「学びの共同体」の実践と探究』 大修館書店
- 根本正雄 2014 『体育の基本的授業スタイル』 明治図書
- 森勇示 2014 「言語活動の充実への懸念」『体育科教育』2014年6月号
- 菊池省三 2014 『菊池省三流 奇跡の学級づくり』小学館
- 河村茂雄 2014 『学級リーダー育成のゼロ段階』 図書文化社
- 栞原昭徳 2012 『体育授業のためのやさしい教授学』 大修館書店
- 細江文利・鈴木直樹・成家篤史・水島宏一・齋地満編 2012 『動きの「感じ」と「気づき」を大切にしたい器械運動の授業づくり』 教育出版
- 根本正雄編 2011 『器械運動指導のすべて てんこ盛り辞典』 明治図書
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター 2011『評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料』 教育出版
- 平野文夫・榊尚信執筆 立木正監修 2007 『絵とことばかけでわかりやすい『マット遊び・マット運動』 小学館

〈参考URL〉

- 文部科学省 2013 『学校体育の充実 指導資料集』
- http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1330884.htm

（^{じしんにかんがひ}うさんがこう転がでるよ）
 になった。みんなであわせてやったから。

【「体育の勉強は好きですか」に対し】
 検証授業前の記述 選択→どちらでもない

すきでも運動が苦手だから。

検証授業後の記述 選択→はい

教え合ったりして楽しいし、うてんが
 うまできるようになったから。
 みんなできょうえくなどをした。みんなであわせて
 いつのまにかできた。

しっかり聞く ◎ ○ △	動きを見る◎ ○ △	伝える ◎ ○ △	教え合い ◎ ○ △
すばやい行動 ◎ ○ △	仲間と協力◎ ○ △	忘れ物なし◎	

図 15 仲間の気付き

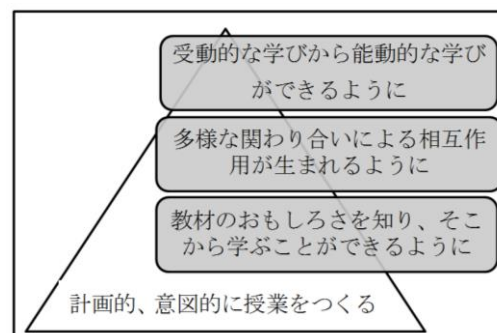
「これからも体育の勉強で教え合いをしたい」の問い で「はい」を選択した子ども達の理由（23人）		「いいえ」を選択した子と もの理由（1人）	
仲間と教え合うと技のポイントに気付き、互 いに成長し、上手にできるようになるから	14	教え合いをしたこ とがあるから	1
仲間と教え合うと楽しいし、仲良くなれるか ら	5		
仲間に上手になってもらいたいから	2		
協力が大切だと学んだから	1		
無記入	1		



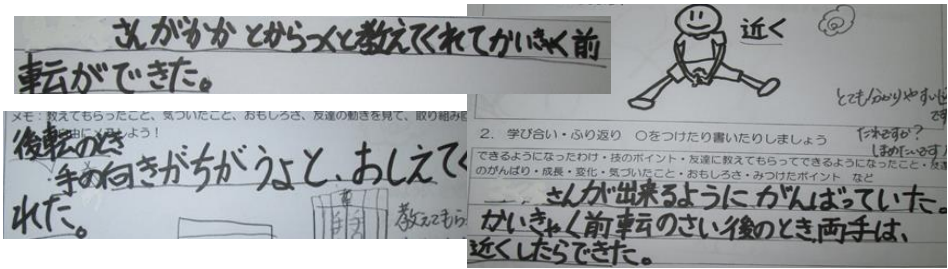
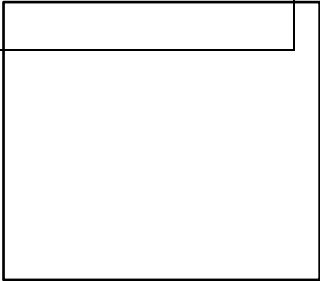
グループ活動の充実により。

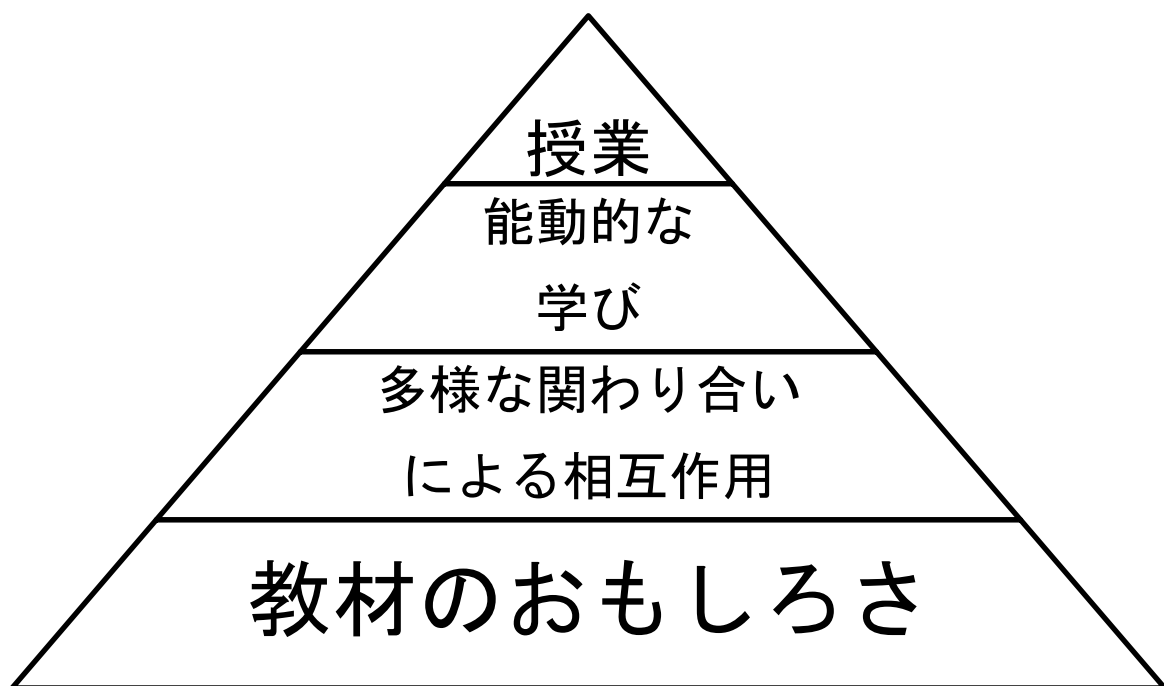


仲間と同じように
動くことが
できるようになっ
た。



開脚前転	後転	開脚後転
・真上に足を上げて、下になったら広げる。 ・手を足の近くに置く。 ・勢いをつける。 ・かかとから床につく。 ・手をつけて立つ。 ・足を思い切って開く。 ・手をつく時と足を開く時は同じ。 ・真上に来て足を開く。 ・後頭部をつける。	・つま先からつく。 ・勢いよく。 ・進む方向に倒れるようにしたら勢いがついた。 ・全体を丸めるイメージで。	・真上に足が行った時に足を開く。 ・真上で足を開くよりそこを少し過ぎた所で足を開くと勢いがつく。 ・回ったときに足を開く。 ・おしりが上にきたら足を開く。 ・手をついた時に足を開く。



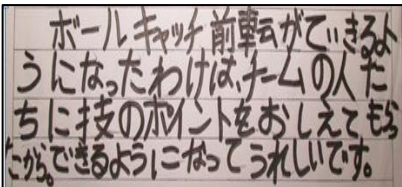


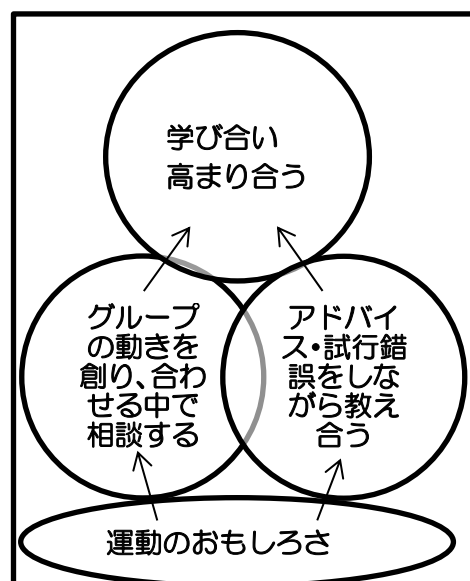
開脚前転	後転	開脚後転
・真上に足を上げて、下になったら広げる。 ・手を足の近くに置く。 ・勢いをつける。 ・かかとから床につく。 ・手をつけて立つ。 ・足を思い切って開く。 ・手をつく時と足を開く時は同じ。 ・真上に来て足を開く。 ・後頭部をつける。	・つま先からつく。 ・勢いよく。 ・進む方向に倒れるようにしたら勢いがついた。 ・全体を丸めるイメージで。	・真上に足が行った時に足を開く。 ・真上で足を開くよりそこを少し過ぎた所で足を開くと勢いがつく。 ・回ったときに足を開く。 ・おしりが上にきたら足を開く。 ・手をついた時に足を開く。

メモ！覚えてもらったこと、気づいたこと、おもしろさ、友達との動きを見て、取り組む様子！
後転の足
手の向きがちゃんとあいてく
水た。

おもしろいからと教えてくれてかいく前
転ができた。

2. 学び合い・ふり回り ○をつけたら思いやりしよう
できるようになったわけ、技のポイント・友達に教えてもらってできるようになったこと、自分
のがんばり、成長・変化、気づいたこと、おもしろさ、あつたポイント、など
せんが出来るようにかんはっていた。
かいきく前転のさい後るとき両手は、
近くしたできた。

ボールキャッチ前転のアドバイスの言葉
・もうちょっと高くボールを投げる。 ・右斜め前に投げる。 ・ボールをまっすぐ前に投げる。 ・キャッチの構えをする。手を広げる。 ・ボールを見る。 ・まっすぐ高くボールを投げて、起き上がる時にボールを取る。 ・ボールを強く投げない。ちょっと弱く投げる。 ・ボールを見失わない。ボールが行く所を予想する。 ・ボールを投げた後、ボーッとしない。 ・リラックスして投げる。 ・速く前転する。 ・足を曲げて前転する。 ・後頭部をつける。 ・前転したらすぐ立つ。次は立ってキャッチする。
ボールをキャッチしている様子やふり返り
 



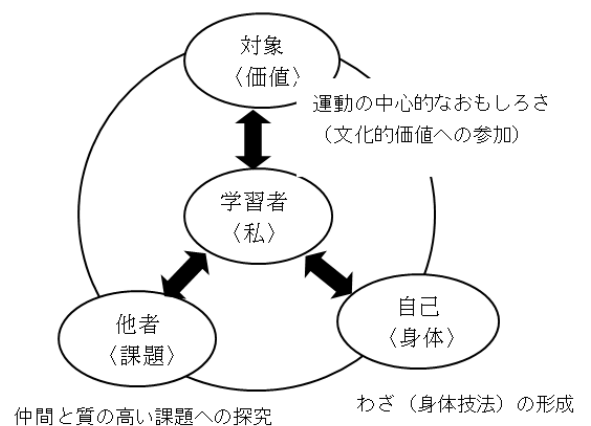
2つのグループによる活動の流れ
① 一方のグループは自分達の動きの中で、見てほしい視点（アピールポイント）をもう一方のグループの仲間に伝えて動きを見せる。
② もう一方のグループは、伝えられた視点を中心に動いているグループの動きを見る。
③ 動きを発表したグループに対し何がどのようによかったか、どこをどのようにしたらよくなるかを伝える。
④ 動く方と見る方を交代し、①～③を繰り返す。
⑤ 次に動きを見せるときは、先ほどのアドバイスを活かして臨む。

全体発表会の流れ
① グループごとに順番にアピールポイントを伝えて動きを発表する。（1回目の発表会）
② 各グループの発表が終わったときにその都度、アドバイスタイムを設定し、教え合う。
③ 練習タイム（仲間のアドバイスを参考に動きを高める。）
④ グループごとに順番にアピールポイントを伝えて動きを発表する。（2回目の発表会）
⑤ 全体でのふり返り

ボールキャッチ前転のアドバイスの言葉	
・もうちょっと高くボールを投げる。 ・右斜め前に投げる。 ・ボールをまっすぐ前に投げる。 ・キャッチの構えをする。手を広げる。 ・ボールを見る。 ・まっすぐ高くボールを投げて、起き上がる時にボールを取る。 ・ボールを強く投げない。ちょっと弱く投げる。 ・ボールを見失わない。ボールが行く所を予想する。 ・ボールを投げた後、ボーッとしない。 ・リラックスして投げる。 ・速く前転する。 ・足を曲げて前転する。 ・後頭部をつける。 ・前転したらすぐ立つ。次は立ってキャッチする。	

(N=24)

	基本的な技	発展技
回転技	前転	大きな前転・開脚前転
	後転	開脚後転
倒立技	壁倒立	補助倒立・頭倒立・ブリ
	腕立て横跳び越し	側方倒立回転



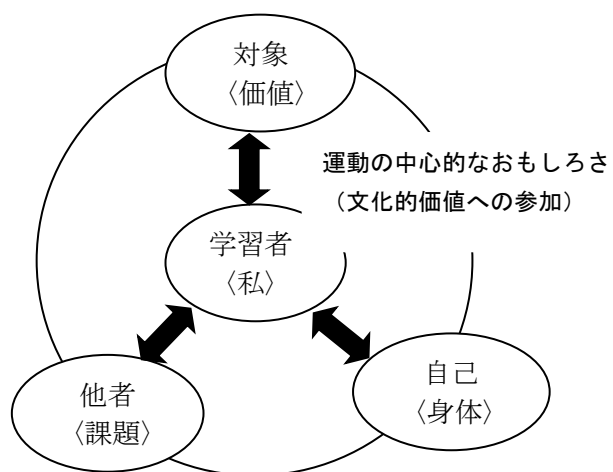
器械運動の技に類似した動き	つながる器械運動の技
ゆりかごから起き上がりジャンプ	様々な前転・開脚前転・台上前転等
背支持倒立からの起き上がり	
ボールキャッチ前転	
足で玉入れ・ゆりかご	後転・開脚後転等
かえる足打ち	倒立・三点倒立・側方倒立回転・開脚跳び・台上前転・首はね跳び・頭はね跳び等
かえるバランス	

		伝統的な学習モデル	新しい学習モデル
身体観	身体観	心身二元論	心身一元論
目標	目標	文化を伝承すること	文化を生み、応用すること
	成果	パフォーマンス	思考と意思決定
教授	指導	教師中心	子ども中心
	学習内容	技術に基づいている	コンセプトに基づいている
	状況	教師と子どもの相互作用	多様な関わりによる相互作用
	教師の役割	情報の伝達	問題解決の支援
	学習者の役割	受動的に学ぶこと	能動的に学ぶこと
	評価	修正・調整（フィードバック）	学んだことの証明と学びのプロセスへの寄与

個人にかける言葉例	全体のかける言葉例
・〇さん〇〇がよくなったね。〇〇したからだね。 ・〇さん〇〇しているからすごいね。 ・〇さん〇〇しているから〇〇となって、本当にがんばっていることがわかるね。	・この動き（活動）の中で〇さんのよい所はなに。 ・〇さんがこうしたことで、みんなが〇〇となり、よさが広まったね。

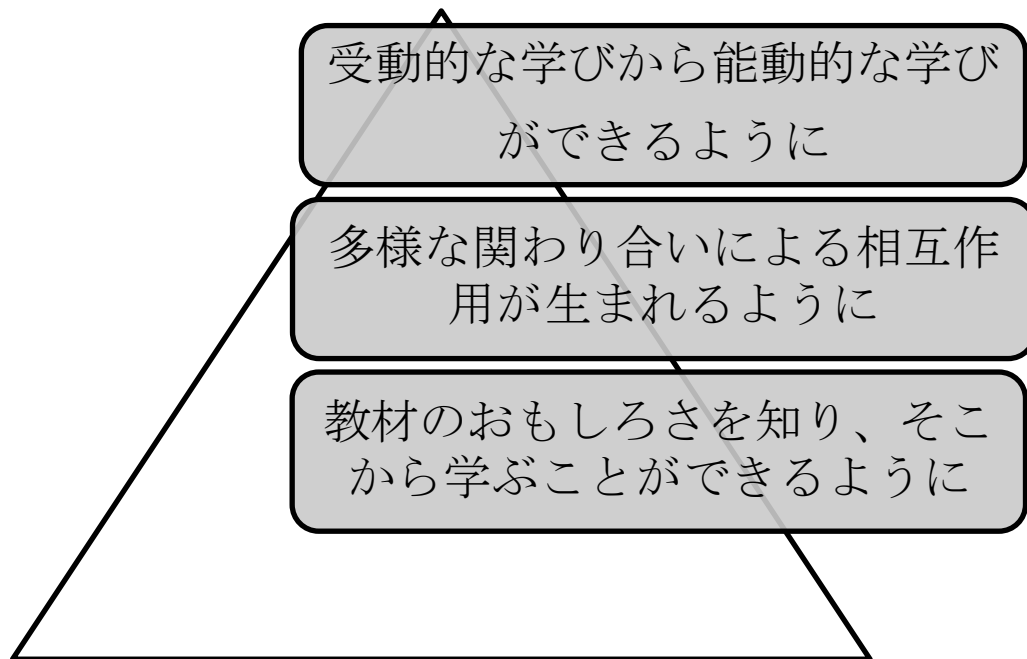
時・人数	教え合いをもとにした記述	人数	合計	感想のみの記述	人数	合計
1時 (24人) (アドバイスメモ導入前)	☆アドバイスをもらったことを活かし、次こうしてがんばる。	1	5人	おもしろかったこと	5	19人
	●仲間の〇〇なよさを自分に活かす	4		仲間のよいところ	3	
				むずかしかったこと	1	
				次できるようにする	7	
				できてよかった	3	
2時 (21人) (アドバイスメモを導入)	アドバイスをもらったことでよかった・こうするといいと分かった	6	19人	けがを早く治して参加したい	1	2人
	●仲間の〇〇なよさを自分に活かす	5		準備が早くできた	1	
	☆アドバイスをもらったことを活かし、次こうしてがんばる。	6				
	仲間に教えることができた	1				
	仲間の〇〇がうまくいかない。どうしたらいいのか	1				

「これからも体育の勉強で学び合いをしたい」の問いで「はい」を選択した子ども達の理由（23人）		「いいえ」を選択した子どもの理由（1人）	
仲間と学び合うと技のポイントに気付き、互いに成長し、上手にできるようになるから	14人	学び合いをしたことがあるから	1人
仲間と学び合うと楽しいし、仲良くなれるから	5人		
仲間に上手になってもらいたいから	2人		
協力が大切だと学んだから	1人		
無記入	1人		



仲間と質の高い課題への探究

わざ（身体技法）の形成



- ① 授業開始の定刻までに集合できる。
- ② 授業で使う学習用具の忘れ物がない。
- ③ 学習への準備や構えができている。
- ④ 日直（当番）の力で授業が始まる。
- ⑤ 教師や他児の発言を注目して聞く。
- ⑥ 自分の考えや意見を発表できる。
- ⑦ 必要なら黒板での発表もできる。
- ⑧ ペアやグループの話し合いができる。